NGNは思惑より「標準化」確立を

内海善雄・前ＩＴＵ事務総局長に聞く

「いかに信頼性を高めるか」が鍵

IP網をベースに 安心して使えるネットへ

従来のPSTN（公衆交換電話網）に代わり、完全IP（インターネット・プロトコル）化された電話網であるNGN（次世代ネットワーク）への移行が急速に進み、世界の通信網が大きく変わろうとしている。昨年までITU（国際電気通信連合）事務総局長を務め、NGNの標準化推進に尽力した内海善雄氏（現トヨタ自動車顧問）にITUのNGNへの取り組みや国際協力の在り方などを聞いた。

▽　▽　▽

――NGNがさかんに論議されています。しかし各国、各地域でNGNの受け止め方に違いが出ているのでは。

内海氏　確かに、それぞれの立場でとらえ方が違うのは事実だ。日本やNTTで使っているNGNの意味、ITUが考えているNGN、将来の大きなマルチメディア通信網という意味でのNGN、いろいろな考え方があるのが現状だ。ITUは、自らの定義に基づいて04年からNGNの標準化作業に取り組んでいる。NGNは、IP網がベースに構築するか〟が最大のポイントで、これを無視して議論を先に進めるべきではない。国やメーカーの思惑が先に働くような状況は避けるべき、というのが私の考えだ。

――ITU提唱のNGNのフィロソフィとは。

全体で品質を保証

内海氏　現在ITUのTセクター（ITU-T）でNGNの標準化作業を進めているが、ITUが考えるNGNはIP網をベースにしてネットワークのサービス品質がいかに保証され、アップグレードされ、世界中でつながるかである。欧州は欧州で、日本は日本で議論しているが、特定の企業の製品や地域標準をNGNと決めるものであってはならない。みんなで議論した結果、全体で品質が確保できなることは確かだが、各国がそれぞれ進めているNGNとはフィロソフィ（哲学）がやや違うように思う。〝いかに信頼できるネットワークを安心して使えるネットワーク、つながるネットワークを築かなければならない。将来的に行き着く点は同じかも知れないが、各国がやっているNGNに関する思惑は、ITUの考えとはやや異なるというのが実感だ。

――話は変わりますが、内海さんはITUの事務総局長として国際協力に尽力されました。協力や援助で先進国はどうすべきですか。

将来見越しアドバイス

内海氏　発展途上国はネットワークを構築するうえで、将来の予測を見越して一番効率の良い投資を考える。先進国は（最新技術動向を）アドバイスして、発展途上国の投資効率引き上げに役立ててもらうことが重要。シリアの例を挙げると、99年のITUテレコム展をシリアの通信大臣が視察。多く展示されているルーターを目にして、世界の通信の将来は交換機ではなく、この製品（ルーター）が使われるのかと驚いた。結局シリアは、デジタル交換機を取り止めIP網を導入してネットワークを一新したと聞いている。

得意の機器を売り込むことも大事だが、将来の予測を見越して、その国の実情に合わせてアドバイスしていくことが国際協力になると思う。もしシリアが目先の利益を考えてデジタル交換機を勧めた企業の言う通り購入したとしたらシリアの通信の進歩はなかったといえる。目先の利益にとらわれず、将来どうなるかを相手にアドバイスすることも重要な国際協力であろう。

［略歴］1942年高松市生まれ。東京大学法学部卒業後、東芝入社。66年郵政省（当時）入省、72年シカゴ大学大学院で政治学修士学位取得。総務審議官、郵務局長などを歴任後、99年からITU事務総局長を2期8年務める。07年3月トヨタ自動車顧問、トヨタIT開発センター最高顧問、4月からは早稲田大学客員教授。